やまどり

俳人協会
群馬県支部
☆
発行所
高崎市飯塚町737
TEL027-361-0870

令和７年度紙上総会　感染症予防対策

群馬県は14年インフルエンザ警報が発令されるなどコロナをはじめ感染症が心配な状況がつづいています。従いまして昨年同様集合型の総会は取り止め、会報「やまどり14号」に総会資料を掲載し報告させて頂きます。

事業報告（事務局長・武藤洋一）
紙上総会（１月）
会報の発行（１月、７月）
県支部俳句大会（会報紙上）
役員会紙上（１月・10月・12月）

会計報告（会計・吉藤淳子）
別掲報告書の通り
監査報告（監査・木下涼薫　吉澤章子）
別掲報告書の通り
予算案（会計・吉藤淳子）
【収入の部】
前年度繰越・４１６、４０３円
会費・70名×2、０００円＝１４０、０００円
収入合計・５５６、４０３円
【支出の部】
通信費・２０、０００円
印刷費・２０、０００円
会議費・１０、０００円
雑　費・２０、０００円
事業費・１５０、０００円
支出合計・２２０、０００円
次年度へ繰越・３３６、４０３円

事業計画（事務局長・武藤洋一）
総会（紙上総会）
会報の発行（１月、７月）
県支部俳句大会（会報紙上）
秋季吟行会（日時、場所未定）
支部役員会（随時）
人事（支部長・原田清正）前年度通り

明けましておめでとうございます
皆様のご健康をお祈り致します
令和７年元旦
俳人協会群馬県支部役員一同

令和６年度収支決算報告書

俳人協会群馬県支部
（令和６年１月１日～令和６年１２月３１日）

収入の部

項目		決算額	備考
繰越金		495,002	前年度からの繰越金
会費	年会費名75名　吟行会費14名	192,000	
収入合計		687,002	

支出の部

項目		決算額	備考
印刷費	会報　総会資料　各種案内等	9,224	
会議費	役員会	2,400	
雑費	俳人協会へ寄付　俳句カレンダー	63,650	
通信費	会報郵送　総会等案内状郵送ほか	18,753	
消耗品	宛名ラベルほか	3,752	
事業費	秋の吟行会	172,820	
支出合計		270,599	
収入合計−支出合計		416,403	次年度へ繰り越し

令和７年１月２５日
上記のとおりご報告いたします。
群馬県支部長　原田清正　㊞　　会計　吉藤淳子　㊞

【会計監査報告】
会計帳簿及び関係書類を監査した結果、適正かつ正確に処理していると認めました。
令和7年１月２５日
監査　木下涼薫　㊞
監査　吉澤章子　㊞

令和７年度紙上俳句大会開催

令和７年度群馬県支部俳句大会は感染拡大防止対策のため紙上俳句大会といたします。ご理解の上、皆様の奮ってのご参加をお願いいたします。

投　句・　３句（当季雑詠・未発表句）
締　切・　令和７年５月３１日
投句料・　無料
発　表・　会報「やまどり第１５号」紙上
選　者・　未定
賞　　・　上毛新聞社賞・支部長賞ほか
投句先・　〒370-0069
高崎市飯塚町７３７原田方
俳人協会群馬県支部 あて

ハガキ裏面に俳句、氏名（ふりがな）住所、電話番号を記載の上お申し込み下さい。
※　一般の方の投句も可。
問い合せ・TEL027-361-0870（原田）

秋の吟行会作品

（あいうえお順）

長英をかくまひし村とりかぶと　大塚　洋二
夕顔の実に目鼻描きハロウィーン
目に浮かぶ湖底の村や紅葉季
蚕村山襞深く装へリ　大谷　孝子
秋曇水車の軸の軋む音
風抜くる鉄道遺構秋の蝶
秋そばを挽くや水車のきしむ音　木下　涼薫
鉱山の息吹今なほ紅葉晴れ
小鳥来る湖底の村を偲びけり
郵便車集落めぐる秋日和　木村恵里子
毘沙門堂前に鶏頭赤く燃ゆ
養蚕家昔の名ごり芋茎干す
半壊のホッパー遺構葛垂るる　斎藤　博文
人住みに蚕屋の改装秋薔薇
長英の隠れ湯跡や熟柿落つ
秋澄むやダム湖を渡る五羽の鴨　高橋　初江
黒ほおずきや紫映ゆる里の秋
ころ柿熟す吾が故郷に似たる里
邯鄲の縷縷縷やんばの湖底より　原田　清正
仰ぎ癖つきてダム湖の紅葉狩
鵙猛ける黒ほほづきは実を孕み
水澄めるまでの幾年八ッ場ダム　深谷　信郎
鉄鉱を積み出す駅や黄葉山
ダム底の吾の小さし天高し
鉱石を運びし貨車や秋の蝶　深谷　征子
山装ふ八ッ場の底に字いくつ
蚕飼村水なき水車まはる秋
肌寒と言葉交わすや八ッ場ダム　松本　睦子
秋深き赤岩の里烏瓜
車窓から赤蕎麦の花吾妻路
壁剥げし蔵に桐紋鵙高音　武藤　洋一
隠れ湯の陰に茸の群隠る
廃駅の錆びし鉄筋赤まんま
屋根に石載せる民家や実紫　宮崎至夏子
ダム湖まで長きトンネルななかまど
村人に会はぬ道筋柿熟るる
養蚕の出梁の空家秋深し　吉藤　淳子
水澄むや鴨の水脈ひく八ッ場ダム
かまつかの背に夫婦の道祖神
鉄の石運びし駅や紅葉山　吉藤　青楊
邯鄲のこゑや八ッ場を去る時に
長英の隠れ家捜す百舌の声

旧六合村吟行記

木村恵里子

爽やかな秋の気配が感じられる十月下旬、俳人協会群馬県支部の吟行会が実施された。バスは新前橋駅前から旧六合村赤岩集落を目指す。七年ぶりとなる吟行会。車窓には霧がうっすらとかかった赤城山や、赤い蕎麦の花が一面に広がる畑など、目を見張る景色がひろがる。

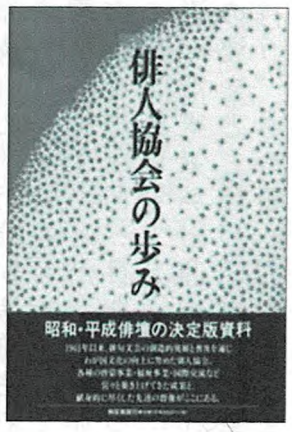
二時間足らずで赤岩集落に到着。心地よい水車の回る音と澄んだ空気が出迎えてくれた。この地区は典型的な農山村の姿をとどめ、昭和の養蚕農家の建造物が残されていると言う。さっそく赤岩神社を目指し吟行開始。水車小屋には朝顔が咲き登るようにたくさんの青い花をつけ見事であった。通りに沿って村人の建てた毘沙門堂が眼をひく。大きな形よき松のある湯本家は改装中で、幕末、高野長英を匿ったと言う言い伝えがある。道端には鶏頭の花が赤く燃えていて、湧き水の音が響いてくる。川の土手に黒鬼灯の紫の花を見つけしばし観察をする。三十分ほどで赤岩神社の鳥居に着くが、本殿まで登らないで近辺の景色を楽しんだ。鳥兜の紫の花が、まるで栽培されているかに咲いていた。帰路、寄生木や手を取り合う道祖神に会うことができた。山の神や水の神を敬う村人の信仰心が、今日まで歴史的建造物を残してくれたと、深い感謝の念がわいた。

次の吟行地「旧ＪＲ太子駅」は、戦中の鉄鉱石需要に応えるためにつくられた駅です。昭和46年に太子線は廃線を迎えたが、当時のホッパー棟やホーム、復元駅舎など見学できた。黄葉に色づき始めた桂の木を見上げ、秋風が心地よかった。

最後は、利根川水系では最大と言う八ッ場ダムです。ダム頂上部からエレベーターで降りてみると、吾妻渓の紅葉が色づき始め、尉鶲や画眉鳥にも会うことができた。帰り際、ダムの近くの川で邯鄲の声を聞いた時は、しみじみ心に残る吟行であったと感じ入りました。幹事さん、役員の方々に心よりお礼を申し上げます。

群馬県支部秋の吟行会参加者

令和7年版 俳人協会編「俳句カレンダー」 体裁 月別 表紙とも13枚綴り 壁掛用
頒価１２００円
送料 1部 ７５０円／2部 １０５０円／3部 １１００円以上郵便料金）
４部以上についてはお問合せください。
※なるべくグループでお申込みください。
申込先 各俳句結社又は各俳句会。個人の方は直接俳人協会カレンダー係へ。
お申込みはお早めにお願いします。
振替口座
００１６０-２-２７３
公益社団法人俳人協会



昭和・平成俳壇の決定版資料
梅里書房刊
本体８０００円＋税
B5版３３６頁（口絵16頁）

１９６１年以来、俳句文芸の創造的発展と普及を通じ、わが国文化の向上に努めた俳人協会。各種の啓蒙事業、福祉事業、国際交流など、営々と築き上げてきた成果と、献身的に尽くした先達の群像がここにある。

【歴代会長】

四季の畔道

茹でた里芋を、「きぬかつぎ」と呼ぶようになったのは俳句を始めてからで、それまではただ「茹でた芋」と、そっけない呼び方をしていた。初めて茹でた里芋を食べたのは、幼稚園の帰りに同級生の家に遊びに行った時だった。桑畑の中の新しい一軒家で、その子の母親が「おやつだよ」と言って、どんぶりに山盛りの小粒な芋を出してくれた。塩味だけの素朴な食べ物のあまりの美味さに、残さずたいらげたのを憶えている。その子の母親は、近くの水車小屋のある大きな農家の娘さんで、お父さんは、いつも背広を着てネクタイを締めていた。

家庭菜園を持つようになり、酒の友にと「衣被」が卓に上るようになると、いつも、あの時のあの子の家のことが思い出される。

別々の小学校に進んだ二人が再会したのは、小学三年生の時だった。彼は以前と違う姓を名乗り、母親と二人暮らしだと言った。

季語には、心の中に入り込み、記憶を炙り出す力があるようだ。（Y）

こらむ・しだりお

東京の落語界には4つの団体がある。その1つ、落語芸術協会（春風亭昇太会長）に「だくだく会」という句会がある。伊勢崎市出身で講談の人間国宝・神田松鯉（かんだ・しょうり）さん、東吾妻町出身の桂夏丸（かつら・なつまる）さんもメンバーだ▼ネーミングは古典落語『だくだく』から。あらすじはー。ドジばかり踏んでいる間抜けな泥棒が夕方、薄明りのついている長屋に入る。目を凝らして見ると、価値のありそうな掛け軸はもちろん、桐の箪笥には結城の着物に博多の帯、茶箪笥の上には銀の時計…。しかし、だんだん目が慣れてくると、欠伸をしている猫はいつまでも口を開けっ放し。長火鉢の鉄瓶から湯気が出ていない▼実は、この長屋の住人は金に困って家財道具すべてを売り払って、絵のうまい友達に、壁に描いてもらったのだ。「これじゃ何も盗み出せねえじゃねえか」。この泥棒は芝居が大好き。「向こうがそういう了見なら、こっちも」。壁に描かれた箪笥から「大きな風呂敷を持ち出して、パァーっと広げたつもり」「結城の着物と博多の帯を包んだつもり」「銀の時計も包んだつもり」▼ここで部屋の隅で寝ていた住人が目を覚ました。泥棒は暗くて人がいるのに気付かなかったのだ。住人は泥棒の一人芝居を見て、「俺も一緒に」とばかりに「長押の槍を小脇に抱えたつもり」。泥棒も乗って来て「その槍をこう押さえつけたつもり」。住人が「泥棒の脇腹にグサリとお見舞い申したつもり」「だくだくっと血が出たつもり」▼句会の名前に、自分たちの句を「駄句」と謙遜しているところも奥ゆかしい。泥棒ネタの中ではポピュラーな話。それを語る落語家たちの句会だが、なかなか本寸法だ。〈楽屋口入りたそうな赤蜻蛉〉〈数へ日の本音を語る楽屋かな〉〈秋うらら早朝寄席に小学生〉など寄席芸人ならではの句が目立つが、一般人と同じように詠んだ佳句も多い。〈玉砂利を走る権禰宜年の暮〉（松鯉）、〈石段を猫の横切る月夜かな〉（同）、〈終戦日祖母の背中の丸さかな〉（夏丸）。選者は比田誠子さん（百鳥同人）。（M）